

[B年] 公現後第4主日(2022年1月23日)**【旧約聖書日課】歴代誌上29章(1~5) 6~19節**

1ダビデ王は全会衆を前にして言った。「わが子ソロモンを神はただ一人お運びになったが、まだ若くて力弱く、この工事は大きい。この宮は人のためではなく神なる主のためのもだからである。2わたしは、わたしの神の神殿のために力を尽くして準備してきた。金のために金を、銀のために銀を、青銅のために青銅を、鉄のために鉄を、木材のために木材を、縞めのうの石、象眼用の飾り石、淡い色の石、色彩豊かな石などあらゆる種類の寶石と大量の大理石を調べた。3更にわたしは、わたしの神の神殿に対するあつい思いのゆえに、わたし個人の財産である金銀を、聖所のために準備したこれらすべてに加えて、わたしの神の神殿のために寄贈する。4建物の壁を覆うためにオフィル産の金を三千キカル、精錬された銀を七千キカル寄贈する。5金は金製品のため、銀は銀製品のためであり、職人の手によるすべての作業に用いられる。今日、自ら進んで手を満ちし、主に差し出す者はいないか。」

6すると、家系の長たち、イスラエル諸部族の部族長たち、千人隊と百人隊の長たち、それに王の執務に携わる高官たちは、自ら進んで、7神殿に奉仕するために金五千キカル一万ダリク、銀一万キカル、青銅一万八千キカル、鉄十萬キカルを寄贈した。8宝石を持つ者は、それをゲルション一族のエヒエルの手託して主の神殿の宝物庫に寄贈した。9民は彼らが自ら進んでさげしたことを喜んだ。彼らが全き心をもって自ら進んで主にさげしたからである。ダビデ王も大いに喜んだ。

10ダビデは全会衆の前で主をたたえて言った。「わたしたちの父祖イスラエルの神、主よ、あなたは世々とこしえにほめたたえられますように。11偉大さ、力、光輝、威光、栄光は、主よ、あなたのもの。まことに天と地にあるすべてのものはあなたのもの。主よ、国もあなたのもの。あなたはすべてのものの上に頭として高く立ておられる。12富と栄光は御前にあり、あなたは万物を支配しておられる。勢いと力は御手の中にあり、またその御手をもっていかなるものでも大いなる者、力ある者となさることができる。13わたしたちの神よ、今こそわたしたちはあなたに感謝し、輝かしい御名を賛美します。14このような寄進ができるとしても、わたしなど果たして何者でしょう、わたしの民など何者でしょう。すべてはあなたからいただいたもの、わたしたちは御手から受け取って、差し出したにすぎません。15わたしたちは、わたしたちの先祖が皆そうであったように、あなたの御前では寄留民にすぎず、移住者にすぎません。この地上におけるわたしたちの人生は影のようなもので、希望はありません。16わたしたちの神、主よ、わたしたちがあなたの聖なる御名のために神殿を築こうとして準備したこの大量のものは、すべて御手によるもの、すべてはあなたのものです。17わたしの神よ、わたしはあなたが

人の心を調べ、正しいものを喜ばれることを知っています。わたしは正しい心をもってこのすべてのものを寄進いたしました。また今、ここにいるあなたの民が寄進するのを、わたしは喜びながら見ました。18わたしたちの先祖アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、これをあなたの民の心の思い計ることとしてとこしえに御心に留め、民の心を確かにあなたに向かうものとしてください。19わが子ソロモンに全き心を与え、あなたの戒めと定めと掟を守って何事も行うようにし、わたしが準備した宮を築かせてください。」

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一6章12~20節

12「わたしには、すべてのことが許されている。」しかし、すべてのことが益になるわけではない。「わたしには、すべてのことが許されている。」しかし、わたしは何事にも支配されはしない。13食物は腹のため、腹は食物のためにあるが、神はそのいずれをも滅ぼされます。体はみだらな行いのためではなく、主のためにあり、主は体のためにおられるのです。14神は、主を復活させ、また、その力によってわたしたちをも復活させてくださいます。15あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのか。キリストの体の一部を娼婦の体の一部としてもよいのか。決してそうではない。16娼婦と交わる者はその女と一つの体となる、ということを知らないのですか。「二人は一体となる」と言われています。17しかし、主に結び付く者は主と一つの霊となるのです。18みだらな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて体の外にあります。しかし、みだらな行いをする者は、自分の体に対して罪を犯しているのです。19知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。20あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。

【福音書日課】マルコによる福音書 1章40~45節

40さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。41イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、42たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。43イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、44言われた。「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。」45しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のいない所におられた。それでも、人々は四方からイエスのところに集まって来た。

「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

【旧約聖書日課】歴代誌上29章（1～5）6～19節

1ダビデ王は全会衆に言った。「わが子ソロモンは、神から一人選ばれた者であるが、まだ若く、経験もない。しかし、この工事は大きい。この神殿〔直訳→城〕は人のためではなく、神である主のためのものだからである。2私は、わが神の神殿のために力を尽くして準備した。金の品のために金を、銀の品のために銀を、青銅の品のために青銅を、鉄の品のために鉄を、木の品のために木材を、カーネリアン、はめこみ用の石、アンチモン、色とりどりの石など、あらゆる宝石と大理石を大量に準備した。3さらに私は、わが神の神殿に対する熱い思いのゆえに、聖なる神殿のために準備したすべてのものに加えて、私の財産である金や銀をわが神の神殿に寄贈する。4すなわち、建物の壁を覆うためのオフィル産の金三千キカルと、精錬された銀七千キカル。5また、金の品のための金、銀の品のための銀であり、それは職人の手によるあらゆる仕事のためである。そこで今日、自ら進んでその手に溢れるほどの献げ物を主に差し出す者はいないか。」

6すると、親族の長たち、イスラエル諸部族の長たち、千人隊と百人隊の長たち、それに王の仕事に携わる高官たちが自ら進んで、7神殿の奉仕のために金五千キカル一万ダリク、銀一万キカル、青銅一万八千キカル、鉄十万キカルを寄贈した。8宝石を持つ者は、それをゲルシオン人のエヒエルの手託して主の神殿の宝物庫に寄贈した。9こうして民は、自分たちが〔直訳→彼らが/別訳→民の長たちが〕自ら進んで献げた物を喜んだ。彼らは一心に、自ら進んで主に献げたからである。ダビデ王も大いに喜んだ。

10ダビデは全会衆の目の前で主をたたえて言った。「私たちの父イスラエルの神、主よ、あなたはいにしえからとこしえまでたたえられますように。11主よ、偉大さ、力、誉れ、輝き、威厳はあなたのもの。まことに、天と地にあるすべてのものはあなたのもの。主よ、王国もあなたのもの。あなたは万物の頭として高みにおられます。12富と栄光は御前より出、あなたは万物を支配しておられます。勢いと力は御手にあり、その御手によってあらゆる者を大いなる者、力ある者となさいます。

13私たちの神よ、今こそ私たちはあなたに感謝し、誉れある御名をほめたたえます。14取るに足りない私と、私の民が、このように自ら進んで献げたとしても、すべてはあなたからいただいたもの。私たちは御手から受け取って、差し出したにすぎません。15私たちは、先祖が皆そうであったように、あなたの前では寄留者であり、滞在者にすぎません。私たちの地上での生涯は影のようなもので、希望などありません。16私たちの神、主よ、聖なる御名のためにあなたの神殿を建てようとして準備したこの大量のものは、すべて御手から出たもの、すべてあなたのものです。

17わが神よ、あなたが人の心を試し、正しいことを好まれることを私は知っています。私はまっすぐな心で、このすべてのものを進んで献げました。また今、ここにいるあなたの民が進んで献げるのを、私は喜びのうちに見ていました。18私たちの父祖アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたの民の心にあるこのような思いをとこしえに保たせ、彼らの心をあなたに向かうものとしてください。19わが子ソロモンが、あなたの戒めと定めと掟を守って何事をも行い、私が準備した神殿を建てることができるよう、誠実な心をお与えください。」

コリントの信徒への手紙一6章12～20節

12私には、すべてのことが許されています。しかし、すべてのことが益になるわけではありません。私には、すべてのことが許されています。しかし、私は何事にも支配されはしません。13食物は腹のため、腹は食物のためにありますが、神はそのいずれをも無効にされます。体は淫らな行いのためではなく、主のためにあり、主は体のためにおられるのです。14神は、主を復活させ、また、その力によって私たちをも復活させてくださいます。15あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのですか。私がキリストの体の一部を取って、娼婦の体の一部としたりするのでしょうか。決してそんなことはない。16娼婦と交わる者は、その女と一つの体となる、ということを知らないのですか。「二人は一体となる」と言われています。17しかし、主と交わる者は、主と一つの霊となるのです。18淫らな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて体の外にあります。しかし、淫らな行いをする者は、自分の体に対して罪を犯すのです。19知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。20あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。

マルコによる福音書 1章40～45節

40さて、規定の病を患っている人が、イエスのところに来て、ひざまずいて願い、「お望みならば、私を清くすることがおできになります」と言った。41イエスが深く憐れんで〔異本→怒って〕、手を差し伸べてその人に触れ、「私は望む。清くなれ」と言われると、42たちまち規定の病は去り、その人は清くなった。43イエスは、彼を厳しく戒めて、すぐに立ち去らせ、44こう言われた。「誰にも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めた物を清めのために献げて、人々に証明しなさい。」45しかし、彼は出て行って、大いにこの出来事を触れ回り、言い広め始めた。それで、イエスはもはや表立って町に入ることができず、外の寂しい所におられた。それでも、人々は四方からイエスのところに集まって来た。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・1月30日「公現後第4主日」の日課主題は「新しい神殿」。『聖書』における「神殿」は、もっぱらエルサレムに造営された神殿に集中して関心が向けられている。建造物としてのエルサレム神殿は、歴史上、①ソロモン王の建てた神殿(ソロモン神殿)、②バビロン捕囚後に再建された神殿(第二神殿)、③ヘロデ大王によって大改築された神殿(ヘロデの神殿)、に分けられる。一方、紀元前後のユダヤ教社会では、前2世紀マカベア戦争でシリア軍に蹂躪され汚された「第二神殿」を奪還し再奉献した記憶が重要な意味を持っていたとされる(このことを記念するのが「ハヌカ祭」)。ユダヤ・キリスト教の歴史においては、バビロニアによって破壊された「ソロモン神殿」が捕囚後に「第二神殿」として再建され、シリアによって蹂躪された「第二神殿」もマカベア戦争を経て再奉献されたのに対して、ユダヤ戦争によって破壊された「ヘロデの神殿」が再建されることがあるのか、という神学的問題提起が1世紀末以降の時代に提起されていたと考えられる。

・旧約聖書日課は、「歴代誌上」から、ダビデ王が行った神殿建築のための準備についての伝承物語の箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、「神殿＝キリストの体」信仰者論を述べる箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、重い皮膚病を患っている人の癒しの逸話を伝える箇所。

旧約日課(歴代誌上 29章より)

・「歴代誌」は、ヘブライ語正典「諸書」に分類される歴史物語作品で、「サムエル記」や「列王記」を参照資料としながら、他の伝承等を利用して独自の視点で南王国史を物語る文書。上下巻に分けられているが、「サムエル記」や「列王記」同様、巻物取り扱いの便宜上分割されたもので、元来一巻本としてまとめられている。王国時代史の構成において、「列王記」が南北両王国の歴代王を洩れなく取り上げた体裁となっているのに対して、「歴代誌」は、もっぱら南王国の歴代王を取り上げることに関心を持ち、北王国の王については南王国との関係性で必要に応じて取り上げられるのみである。また、「歴代誌」は、同じく正典「諸書」に分類される「エズラ記・ネヘミヤ記」(ヘブライ語正典では両書は一つにまとめて取り扱われる)と視点や文体、構成等における共通性が認められるが、実際、古い伝承ではこれらの文書がエズラによって著されたと伝えられている。これらの文書は、バビロン捕囚後に行われた正典「律法と預言者」の編纂完了後、ユダヤ共同体としてのアイデンティティの基盤としてユダヤ民族主義が主唱されるようになっていく時代に呼応して作成されたと考えられ、もっぱらダビデ王国至上主義的歴史観に基づいている。日課箇所も、「列王記」が否定したダビデ王の神殿建築計画を、ダビデ王に帰するために強調された独自内容。

・日課箇所は、ダビデ王がソロモン王に先だって神殿建築の開始を宣言したとする「歴代誌」独自の物語の一部。一連の独自物語は、ダビデ王が実施したとする人口調査(上21章)に続く出来事として描かれており、人口調査に関する記事を中途半端に取り上げる「サムエル記」(下24章)に比べると、より現実味のある叙述となっている。人口調査は、もっぱら「税徴収」を目的として行われるものであり、神殿造営という大事業を遂行する前提として不可欠なものである。「歴代誌」は、この人口調査に関する記事に続いて、神殿造営の準備としてレビ人や祭司などの神殿職制の整備(上23~26章)、軍隊組織の整備(上27章)、財産管理の整備(上27章)などの実施が行われた上で、神殿建築事業開始の宣言がなされた(上28章)と物語っている。日課箇所は、これらの事業が動き出したことを踏まえて、ダビデ王がいかにか謙虚かつ敬虔な姿勢でこれに臨んでいたかを描き出しているのである。

使徒書日課(Ⅰコリント6章より)

・「コリントの信徒への手紙一」は、使徒パウロが自ら創設したコリントの教会に宛てて記した一連の書簡の一つで、初期のものと考えられる。新約正典には、「手紙二」も収められているが、パウロがコリント教会に宛てた書簡は他にも複数あったと推認される。コリント教会は、パウロがユダヤ人夫妻アキラとプリスキラなどと協力して創設したが、パウロが離れた後は、さまざまな指導者を受け入れながら自主的な運営を進めていたとみられる。その結果、さまざまな教えの立場が混在し、党派的対立が見られるようになったため、パウロを指導者として慕う信者らが助言を求めるなどして、パウロとの間で書簡のやり取りが頻繁に行われるようになったのであろう。「手紙一」は、おそらく教会内で起こっていた具体的な問題や混乱を伝え聞いたパウロが、それらに対してできるだけ具体的な助言を与えようとして記した書簡となっており、さまざまな課題が羅列的に取り上げられるような構成となっている側面があることを否めない。しかしながら、そのような構成にもかかわらず、全体として、使徒パウロは、「キリストとの交わり(コイノニア)」(1:9)、あるいは「キリストの体」(6:15、10:16、12:27)などの用語を用いた教会論を展開し、「あるべき教会の姿」を示すことを目指して本書簡を書き進めていることが分かる。

・日課箇所は、「聖霊の宿る神殿」としてのキリスト者論が述べられている。その前提として、「自分の体がキリストの体の一部」であるというキリスト者論の確認が行われているが、おそらくこれは、パウロが「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受け」(ロマ6:3)という初代教会で共有されていた洗礼論に基づいて必然的に導き出された表現であろう。これを別の用語で語るのが、「主イエス・キリストとの交わり(コイノニア)に招き入れられた」(Ⅰコリ1:9)という表現である。これらが総体としてパウロのキリスト者論を構成している。

福音書日課(マルコ 1 章より)

・日課箇所は、重い皮膚病の人が自ら主イエスのもとに来て癒しを願い、それに応じた主イエスが彼を癒された逸話を伝える箇所、共観福音書に共通する。おそらく、続く「中風の人の癒し」の逸話および「レビ(マタイ)を弟子にする」逸話までがひとまとまりの伝承として構成されている。それは、レビを弟子にする逸話の終わりに「医者が必要とするのは…病人である」という句が置かれていることから、病人の癒しと徴税人レビの招きがセットになっていることから示される(ただし、マタイ福音書は、この構成を崩して、他の逸話伝承を間に挿入している)。

・「重い皮膚病を患っている人(レプロス)」は、以前は「らい病を患っている人」と訳されていた。皮膚病を「汚れ/穢れ」と見て社会的隔離を強要し事実上の生活空間からの排除をすることは、古来あらゆる社会で行われてきたが、ユダヤ人社会ではこれを「律法」の定めに従って処理してきた(「レビ記」13~14 章)。「律法」の規定は、皮膚病を「汚れ」として罹患者を排除するために設けられているというよりは、罹患した者が隔離された上で回復した後、社会的に復帰するための手続きを定めたものである。日課箇所、主イエスが癒した者に対して祭司に快癒の証明をもらった上で規定の献げ物をするように告げているのは、まさに、「レビ記」の定める社会的復帰手続きを取るべきことに焦点を当てられているということである。その意味で、この逸話は、病気の癒しに関する出来事ではなく、病気によって社会的に排除されていた者が正しく社会に復帰させられるべきことを問う出来事として伝えられている。なお、「レプロス」を聖書協会共同訳(2018年)は「規定の病を患っている人」と訳出しているが、この訳語によって、「律法」が規定していることや、その主旨を汲んだ主イエスの対応などが適切に示されるかは疑問が残る(私見によれば、「規定の病」という訳語は、「律法」の規定を想起させるというよりは、「指定感染症」や「法定伝染病」のような社会的規定という印象以上のものは読者にもたらさないとと思われる)。

・この逸話中、癒された男が主イエスから「誰にも、何も話さないように気をつけなさい」と忠告されているが、その意図されたことに関しては解釈が分かれる。いわゆる「メシアの秘密」論に基づいて、主イエスはその「神の子」的能力を秘匿するために、口外しないよう釘を刺されたという解釈もあるが、すでに「いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし」(1:34)ていらっしやるにもかかわらず、その人々に対しては口止めされた形跡はない。弟子たちの主イエスに対する無理解を問題にする解釈は、この場面では、口止めされたのは癒された男だけなので、当てはまらない。むしろ、治癒の証明を祭司から受けることを最優先にさせるための口止めと解するのが自然かもしれない。

来週の誕生日 (1月30日~2月5日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-2 番「聖なるみ神は」(= I 18)は、17世紀ドイツ最大の讃美歌作曲家J. クリューガーが作曲した曲に合わせて、20世紀日本の礼拝学・讃美歌界をリードした由木康が自ら編纂に携わった1931年版『讃美歌』のために新たに作詞した讃美歌。
- ・21-419 番「さあ、共に生きよう」は、ドイツで毎年行われている全国信徒大会1983年大会のために編纂された讃美歌集『いのちに立ち返ろう』から採用された讃美歌。
- ・21-416 番「神の民は」(= II-145「かみのたみは」)は、オランダの讃美歌作家オースターハウスの作詞。彼は、元カトリック司祭だったが離脱して活動が続いている。この讃美歌は、エキュメニカル聖歌集で発表された後、WCC編『今日の新しい讃美歌』(1966年)に再録、英語版から邦訳が作られた。

21-419「さあ、共に生きよう」

Damit aus Fremden Freunde werden

1. Damit aus Fremden Freunde werden, / kommst du als Mensch in unsre Zeit: / Du gehst den Weg durch Leid und Armut, / damit die Botschaft uns erreicht.
2. Damit aus Fremden Freunde werden, / gehst du als Bruder durch das Land, / beegnest uns in allen Rassen / und machst die Menschlichkeit bekannt.
3. Damit aus Fremden Freunde werden, / lebst du die Liebe bis zum Tod. / Du zeigst den neuen Weg des Friedens, / das sei uns Auftrag und Gebot.
4. Damit aus Fremden Freunde werden, / schenkst du uns Lebensglück und Brot: / Du willst damit den Menschen helfen, / retten aus aller Hungersnot.
5. Damit aus Fremden Freunde werden, / vertraust du uns die Schöpfung an; / Du formst den Menschen dir zum Bilde, / mit dir er sie bewahren kann.
6. Damit aus Fremden Freunde werden, / gibst du uns deinen Heiligen Geist, / der, trotz der vielen Völker Grenzen, / den Weg zur Einigkeit uns weist.

21-416「神の民は」

Aan wat op aarde leeft

1. Aan wat op aarde leeft, geeft Gij hetzelfde brood.
En wie er U om smeekt, wordt met uw Geest gedoopt.
Geef ons dezelfde taal om uw Woord te verstaan.
Bewaar ons in uw hand, bewaar ons in uw Naam.
2. Wie in uw Vlees gelooft, geeft Gij uw eeuwig Woord.
Omdat Gij zijt gedood, bestaan wij altijd voort.
Leid al wie leven wil uw woning tegemoet
omwille van uw dood, omwille van uw bloed.
3. O Geest, die levend maakt en voegt het al aaneen.
Wij zijn verstrooid geraakt, maar Gij houdt ons bijeen.
Weersta toch aan de macht die onze harten scheidt,
o alvermogenend woord, o licht van eeuwigheid.